

平成21年 6 月 8 日現在

研究種目： 基盤研究 C
 研究期間： 2007～2008
 課題番号： 19530596
 研究課題名（和文） 文化的学習としての母子の語り - 語りスタイルの国内地域比較

研究課題名（英文） Narrative between mother and child as cultural learning.

研究代表者

上村 佳世子 (UEMURA KAYOKO)
 文京学院大学・人間学部・教授
 研究者番号： 70213395

研究成果の概要：

母子共同の語りを文化的学習場面としてとらえ、語り内容の国内地域差を検討することを目的とした。語りの内容、親の発達期待と子どもの対人関係課題の結果の関連性について検討した。東京および山口の母子を対象とした調査では、母親の期待や評価と子どもの社会的認知能力の間にはずれがあることが示唆された。さらに、東京と沖縄の小学生を対象とした対人課題の調査から、子どもたちは他者感情を読みとる際に、他者に対する特定の態度をおとなとの語りなどのなかでルールとして学習している simulation theory 方略を使用していることが推測された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野： 発達心理学

科研費の分科・細目： 心理学・社会心理学

キーワード： 語り、母子、地域差、発達期待、心の理論、Happy Victimizer 課題

1. 研究開始当初の背景

線画を媒介とした母子の語りの形式や内容について、文化差（日本・中国・米国）および国内地域差（東京・山形・沖縄）の検討をおこなってきた。そこには生活環境における、社会文化的ルールの獲得に基づく母子の教示・学習課題があるものと考えられた。すなわち、提示された線画を前にして、その状

況や人間関係をどのように解釈し、自分ならその問題をどのように解決したらよいかを母子で語ることは、生活環境における適応的なスタイルに関する文化的学習の場と考えられる(柿沼ほか,2006; 上村・柿沼,2006)。具体的には、人間関係の葛藤やトラブルの解消のしかたについて、中国および日本の母子は画面の渦中の人物の内面に視点をあてており、日本ではその善意に注目しており、

中国ではその結果として起こる否定的な事態から、子どもにそうならないためのルールを学習させようとしていた。それに対して米国では、物語の前後関係に注目させ事態の対処方法を提示していた(柿沼ほか, 2006)。国内地域比較の結果からは、東京の母子が状況に含まれる要素を客観的に検討し、複数の要素からひとつを選択する方略を取ったのに対して、沖縄と山形の母子は、状況のトラブル内容には細かく触れず、とくに原因を引き起こした人物を特定することは少ないという特徴を示した。

これらの母子の語りの文化差、地域差は、生活環境のなかでの他者との距離や移動性などとの関連で検討していく必要があるものと考えられた。このことから、他者や対人関係やその対処に対する認識がどのように形成されるかを、母子の語りだけでなく、子どもの心の理論の成立や母親の子ども観および発達期待などと合せて検討していくことが必要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究では、本研究は、母子の共同の語りを文化的学習場面としてとらえ、親が提示し子どもが使用する情報や語り内容の国内地域差を検討することを目的とした。語りの内容および語り形成の背景となると考えられる、親の発達期待と子どもの対人関係に関する評価、および子どもの他者の感情の読み取りを測る Happy Victimizer 課題の結果の関連性について検討をおこなった。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者

東京および山口の4歳から6歳の幼児とその母親29組、東京および沖縄の小学校1年生から4年生の児童393名を対象として調査をおこなった。母子の調査については、東京ではS大学の同窓会を通して幼児をもつ母親に対して調査依頼をし、応諾のあった母子について大学もしくは家庭において調査をおこなった。山口では、Y幼稚園を通して依頼し、応諾のあった母子について幼稚園で調査をおこなった。

子どもの認識形成の背景を知るための補助資料として、東京および沖縄の大学生に対して、自己および他者志向と生活環境についての質問紙調査をおこなった。

(2) 調査方法

幼児の調査： 幼児とその母親の調査は、以下の項目で構成されていた。

4枚の絵の語り： 対人的な葛藤を暗示した線画を提示して、自由に母子に語ってもらった。

心の理論および Happy Victimizer 課題： 線画と物語を子どもに提示して、心の理論の成立および対人的トラブルの加害者と被害者の感情の認知的理解について、調査者による2課題をおこなった。

母親の子どもの発達期待： 東・柏木・Hess(1977)の発達期待についての調査 DEQ を使用し、母親が子どものどの分野の発達をより重要と考えるかについて、41項目4件法に回答を求めた。

小学生の調査： 小学生の調査は、以下の項目で構成されていた。

心の理論課題および Happy Victimizer 課題： 母子調査で使用した課題を、質問紙形式に改変し集団式で調査をおこなった。

大学生の調査： 大学生の調査は地域特性を知るための補助資料としておこなわれたもので、以下の項目で構成されていた。

発達期待： 東ら(1977)の発達期待調査を、将来自分が子どもをもつと想定して回答を求めた。

生活環境調査： 子どもの頃の就寝形態や年賀状の数、家族や近隣の他者との付き合いなど、生活環境や対人的距離について調査をおこなった。

4. 研究成果

東京と山口の母子の語り

4枚の線画を介した東京と山口の母子の語りを比較したところ、上村・柿沼(2006)と類似した結果が示された。東京の母子は、線画に示された出来事の前夜、対人的葛藤の原因について複数の可能性を探り、さらに人物の気持ちにも言及しながら、原因の特定と事態の対処について、母親が質問をして子どもに答えさせるという形式で語りが進行していた。それに対して、山口の母子は、全体の語り時間は相対的に短く、内容についてもやや表面的な側面に留まる傾向が示された。母親が主導的に語りを進める傾向はさらに強く、登場人物の気持ちに言及し、原因を明確にしたりそれを引き起こした人物を特定して検討するという傾向は、東京の母子と比較すると低かった。

語りや認識の地域差は生活環境と関連があるものと解釈された。人の移動が激しく、知らない他者とも付き合うことも必要となる東京では、相手の行動の意図を複数の観点から検討し、事態やその対処を探ることが求められる。それに対して、人の移動が少なく、長い期間その地域で生活する人の多い山口では、対人的葛藤の原因を明言するよりも、他者の気持ちを読んで解決を優先することが求められるものと考えられた。このような

母子の語りには、対人的は判断方略や解決の方向性が示唆されており、語りに参加することで、子どもにとって場面の認識や対人的な対処方略などを学習する機会が提供されていることが示唆された。

今後は、語り資料に含まれる単語分析をおこない、どのような内容のカテゴリが優先され、どのように物語が形成されるのかを詳細に分析していく予定である。

東京と山口の子どもの認識と母親の期待

心の理論課題については、東京の子どもの通貨率が山口よりもやや高かった。Happy Victimizer 課題については、大きな地域差は示されなかった。加害者の明示的な行為に伴う対人的なトラブルに際して、当事者の感情の認知的理解について、いずれの地域の幼児も被害者の感情は正しく判断できるが、加害者の感情を肯定的にとらえてしまう傾向を示した。

以上のような結果は、母親の発達期待や子どもの社会的能力の評価との間にはずれがあることを示唆している。すなわち、母親は「他者の気持ちを察することができる」「友人関係のなかで円滑に行動することができる」といった子どもの他児に対する思いやりや協調性の発達に大きな期待をもち、さらにそれらに関連する母親の子どもの現状認識に関する項目において評価が高かったにもかかわらず、子ども自身は対人的課題に際して、その大部分がその社会的状況や当事者の感情をきちんと読めていないことが示された。

母子間の認識のこのようなズレを考えると、改めて心の理論の成立や母子の語りの内容の意味をとらえなおし、対人的葛藤に直面したときに、子どもにとどのような認知的判断が可能であるかを、母親自身がきちんと認識することが必要である。さらに子どもに正しい判断の枠組みを形成し、その問題解決の対処方略を学習させるためにはどのように教育していいかを再検討する必要があることがわかった。

東京と沖縄の小学生の対人認識課題

Happy Victimizer 課題を質問紙にして小学校で実施したところ、小学生のほとんどが加害者の気持ちを察する課題を通過することはなかった。しかし、同課題を「あなただったら」と判断対象を自分に置き換えると、2年生から正当数が増加した。質問紙事態での課題実施という、課題理解のしにくさの制約はあるものの、児童の対人的状況と他者の感情の認知的理解についての結果は特記すべきものであった。

地域を問わず登場人物と自分のケースに判断の違いが示されたということは、子ども

たちは他者感情を読みとる際に、意図を論理的に推論する theory-theory 方略をとっているというよりは、ある状況では他者に対する特定の態度を、おとなとの語りなどのなかで一定のルールを学習する simulation theory 方略を使用して課題解決していることが推測された。すなわち、かれらは状況の物語的な流れのなかで、対人的な立場関係を論理的に判断し、そこからそれぞれの感情を推測することはできていないことがわかった。

このことを踏まえ、これまで地域差を見いだしてきた母子の語りを再検討するとともに、心の理論課題の成立や親の自己・他者観の違いとの関係性から、あらためて子どもの社会的認識についての生活上の指導のありかたについてさらに検討が必要であることが示唆された。すなわち、表象的レベルの心の理論ではなく、現実の世界で他者の内的状態を読み取りや行動するという、状況的・実践的な心の理論(丸野・岡崎,1998)を、周囲のおとなとの間の語りのなかでどのように共同構成していくかという教育の目的と手段が十分に検討されなければならない。

東京と沖縄の大学生の発達期待と生活環境

地域差の背景的情報として、大学生による子どもの発達期待と生活環境についての調査をおこなった。その結果、両地域ともに共通して、礼儀、社会的スキル、言語による自己主張については重要な側面としてとらえていた。重要性の低い項目には地域がみられ、沖縄では情緒的成熟が、東京では自立を求めることが明ら少ないことが明らかとなった。

養育時の生活環境については、やはりいくつかの点で差が示された。沖縄では、小学校高学年になっても家族のおとなと寝る割合が高く、多くの親戚が集まる機会が多いという特徴が示された。一方の東京では、小学校低学年を過ぎると、おとなと寝ることはかなり少なくなり、家族内での決まりごとや年賀状の数が多かった。このことから、沖縄がお正月や運動会など大勢の親戚との付き合いの機会をもつなど、直接的な社会的関係に参加する機会が多く、家族内のおとなと一緒に就寝形態をとるなど、対人的な距離が小さく直接的であるのに対して、東京では、東京は家族の中にもルールが存在し、社会的関係も直接的対面というよりは、年賀状などで維持されるといったように、間接的な媒介手段によって対人的関係が維持されていた。

以上のように、2つの地域では他者関係の親密性や重要性、さらにその維持の方略が異なることが明らかとなった。このことは、生活環境において子どもに期待される、対人的葛藤やその対処についての判断の枠組みも社会的スキルにも地域差があることが示唆さ

れた。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 5 件)

Kakinuma, M. & Uemura, K. 2007
Cultural differences in use of pointing during storytelling sessions. Cognitive Development Society V Biennial Meeting(2007年10月27日, Santa Fe, USA).

柿沼美紀・上村佳世子 2008 語り場面に見られる母子の相互作用 - 男児に寛容な日本の母親 日本発達心理学会第19回大会(2008年3月21日, 大阪国際会議場)

Azuma, H., Jing, J., Kakinuma, M.ほか
2008 Narrative culture, person perception and future perspective: Bi- and Tri-cultural studies. 20th Biennial ISSBD Meeting(2008年7月15日, University of Wurzburg, Germany).

柿沼美紀・上村佳世子・Crystal, D.
2008 「友達と仲良くする」ために必要な能力の検討 日本教育心理学会第50回総会(2008年10月11日, 東京学芸大学)

柿沼美紀・上村佳世子・東 洋・小林福太郎・佐藤仁美・Crystal, D.か
2009 Happy Victimizer 課題でみる子どもの他者理解の発達-situation theory 方略が先行 日本発達心理学会第20回大会(日本女子大学, 2009年3月24日)

〔図 書〕(計 1 件)

東 洋 心理発達と文化 - 約40年の私的回顧 平木典子・稲垣佳世子・斉藤こずゑ・高橋恵子・氏家達夫・湯川良三(編) 児童心理学の進歩 2008年度版(pp.225-247) 金子書房

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上村佳世子 (UEMURA KAYOKO)
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号: 70213395

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

柿沼美紀 (KAKINUMA MIKI)
日本獣医生命科学大学・獣医学部・教授
研究者番号: 00328882
東 洋 (AZUMA HIROSHI)

東京大学・教育学部・名誉教授

研究者番号: 60012548

(4) 研究協力者

嘉数朝子 (KAKAZU TOMOKO)

琉球大学・教育学部・教授

大城りえ (OHSHIRO RIE)

沖縄キリスト教短期大学・保育科・準教授

上地亜矢子 (UECHI AYAKO)

琉球大学・教育学部・非常勤講師